

# 保育への視座(II)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

ある日久しぶりに四歳になったばかりの孫（男児）と遊ぶ機会があった。彼の母親が私に「お茶はいかが」と言ってくれたので「ありがとう、じゃただこうか」と言ってお卓の上に用意してもらったお茶をいただくことすると、孫も「ぼくはジュース」と言ってお卓の私の真向かいに腰をかけて座った。

彼には丸い把手のついたコップにジュースが用意された。すると彼は何を思ったのか食卓のところから少し手をのばすと、届く距離にある本箱の書籍が立てである棚のところにコップを置いた。どうするのか見ていると

腰掛けた位置から動かず、そのまま手をのばしては、そのコップをとってジュースを飲むようにしている。その姿をみた母親は、「そのような本箱のせまいところに置いて飲まないで。広い食卓の上に置いて飲もうね」とやさしく指示をしたが、ただ黙々と手をのばしてはコップをとってジュースを飲んでいく。

「おとすかも知れないよ。おとすと全部こぼれてなくなってしまうよ」と言葉かけが続くが、聞いているのか聞こうとしないのか指示通りに食卓の上にコップを置こうとはしない。「こぼれたらその本が濡れてお父さん

やお母さんも困るから、はやく机の上に置いて飲みなさい」と少し命令口調になる。

私もすぐ孫と真向かいに座っていてその親子のやりとりの様子を見聞きしながら、母親のことはに抵抗しているようにもまた困惑しているようにもみえる彼の行動をなんとか援助しなければと思いつながら、実は第三者的、傍観的な姿勢になっていたが、何時の間にか、母親の立場をどう援助すればよいかについても微妙に心が動いていたようにもおぼえている。しかし結局は「手をのばしてとのり、とりにくいでしょう。近くに置けば飲み易いよ」と、どっちともとれないことを投げかけるのが精一杯であった。結果は「そんなこととつうに見通しているよ」と言わんばかりの顔つきで、手をのばしてコップをとり飲むことを続ける。

その直後、腰かけから降りて動いたので、

新しい動きを期待しながら少し目を離した。そして彼がまた席にもどったので、コップの方を見ると二つ折りにしたティッシュペーパーの上にコップが置いてある。

私は瞬間「ははあーん」と息をのみ込んだ。彼は考えたなと思った。こぼれたら困ると言われたのを聞いて、恐らくそのコップの下にティッシュペーパーでも敷けばと考えたのであろう。彼なりの生活の知を働かせたのである。(このティッシュへの思いつきにはきつと何時か過去になにかがこぼれてティッシュでふきとっているのをみたとか、下に敷いてももらった体験を思い出したのであろうと思う) 母親や私たちの話を聞こうとしないので、抵抗しているようにも見えていたが、指示されている問題は聴いていたのだった。ただ聴くだけでなく、彼自身なりの対処の方を考え、見つけ、考えもして自分のもって

いる知識や技術をフルに働かせて、これを行  
動に移している。その行動は大人の指示内  
容、指導の出身からすれば、その場つくりの  
ようなちょつとしたつまらぬ活動のように  
見えるが、最悪の状態や問題点に対して精一  
杯の対処のし方を発見し現実化したことはす  
ばらしいことである。

こうした場合大人たちが「このようにある  
べきだ」「このようにするのが最善である」  
と考えてそのように子どもにわからせて動か  
せようとすればする程、大人の方にイライラ  
がつのるばかりか、子どものささやかながら  
の発見や工夫や現実化の今、そこにおこつて  
いる動きが見えてこなくなるのが如何にも  
悲しいことではなからうか。

相手の子どもも悲しいに違いない。これが  
わかってもらえて認めてもらえればそれがう  
れしいのである。

同じ行為を続けているのを見てさらに「こ  
ぼして、なくなっても、もうジュースはあげ  
ないわよ」という母親のことばから、子ども  
の新しい動きにも気づいていないことや、そ  
れを認め子どもその瞬間の心にふれようと  
していないことは明らかである。

そして気づいてもそのことを言葉にできな  
かった。私自身に対しても彼はうれしくはな  
かったであろうことは間違いない。子どもに  
とってうれしい存在となるためには、その時  
その場の瞬間の心にふれてもらえた時ではな  
からうかと思う。

そして、教えようとすることも、このうれ  
しい関係が成立してこそ、素直に受け入れも  
するのである。

この私自身、気づいた子どもの心の動きを  
言葉にしてふれられていたら、きつと私と彼  
との関係はもちろん、ひいては一生懸命指示

命令して教える育てようとしていた母親との関係もうれしい関係に変わっていったであろうことを察するに余りがある。

そこでこのことに関連して是非考えてほしいことがある。

それは、近年、幼児理解ということに関して「受け容れる（受容する）」ということばが盛んに使われ、その課題の中で、子どもの行為を認めその心持ちを受け容れなくてはならぬことはわかるが、「幼児の行為をすべて受け容れるだけでよいのだろうか」という疑問が話されることに会うことが多い。その疑問で問われていることの背景がよく理解できない。疑問を出される先生が何が言いたいかが見通せるからである。

その時、「受け入れることをやってみられたことがありますか」とたずねると、殆んど答えが返って来ない。実践してみても幼児を受

け入れるとどうなるのか。そして自分（保育者）の実践は本当に「受け容れた」ことになっていいのかを確認してほしいと話して来ている。

今、保育が前進しないのは、このようにことばだけが先行して、実践しながら考える姿勢が弱いからではないかと思う。観念的・概念的になり過ぎてはいないだろうかと思う。なおその受け容れられた子どももその受け容れの過程や結果がひとりひとり異なるはずである。実践の一つ一つの積み重ねの中で一般化されていくことが少なく、抽象的になってしまっている。まず保育者ひとりひとりが考える「受け容れ」をやってみて、その事実で考えてみてほしいと思う。

いまひとつは「叱らなければならぬ時は叱るべきでは……」ということが簡単に受け取られてしまっているように思われてならぬ

い。

今回前述したような指導をしようとしている保育者とその困ったことをしている子どもとの関係は勿論のこと、保育者が日常生活の中で子どもとどのようにかかわっているのか、心に分れようと努められて来ているのかどうかによってもそのことは随分違って来ることについてたしかめられていないように思う。指導したり方向づけたり、コントロールできないで困っていることへの援助をしたりする内容とかそのタイミングのことのみで終わって、その関係のあり方が余り深く問題になっていない。やはりここにも具体的な実践的研修に欠けているのではと思われる。「こういう場合には」「こんなことをしたときは」と幼児の価値判断が必要と考えたり価値志向の要求が起こった時に、特にこのような点について探求してはほしいと思う。

保育の実際を参観し、保育の現場に臨むときそしてこの保育における人間関係の中心にふれるとき、そこに起こっているひとりひとりの子どもの瞬間、瞬間の心の動きにどのように触れているだろうか、そしてその時その場の心の動きに相応する親しみのあるうれしい関係の場に出会えたとききつと感激をおぼえることができると思う。

保育について迷いが出て来たり疑問がわいて来たら、まず、きょう一日をふりかえって、保育者が子どもにとってうれしい人になれているか。子どものその時その場の心もちに引きつけられたことは何だったかを確かめてみてほしいと思う。例えばそれがどんなにささやかなことであっても。

(元・洗足学園短期大学)